



神保的には「フェスタ」と「博物館」

毎年、11月になって年賀はがきが発売される頃から、急に時間の経過スピードが増して来るような気がします。当コラムでも、毎回この時期は「一年間を振り返って」といった内容の文章を書かせて頂いておりますが、入稿するとすぐに次の年明け用に書く内容を考えねばならず、ひしひしと早さを感じています…。

…と、前置きが長くなりましたが、今年印象に残った業界関連ニュースを挙げるとすれば、6月に開催された「もっと楽しく!! もっと遊べる!! パチンコ&パチスロフェスタ」と、8月の「パチンコ博物館」再オープンの、2つになりますね。

思えば前者のパチンコ&パチスロフェスタは、昨年2月に業界側からの大きな提案という形で、初めて「コンセプト機」の提示が行われたイベントでした。しかし、すぐ後に発生した東日本大震災によって、今年はいわば「仕切り直し」のような形で行われたものとなり、その真価がやっと問われることになったといえます。もちろん、コンセプト機といっても規則やコストなどをクリアしなければ、なかなか実現しないものがほとんどだったため、即その結果を出すというのは難しいでしょう。ただ、ファンの関心を集め、意見を吸い上げるという場としては、十分存在意義があったと思われます。来年以降も継続していただけることを、業界関係者の一人としても強く願わずにはおれません。

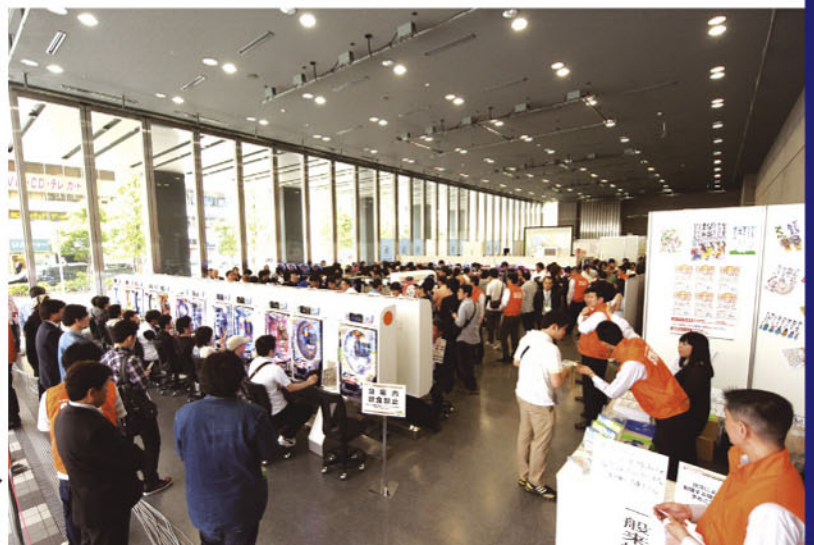
それから、8月の「パチンコ博物館」再開は、一昨年末まで上野で開設していた博物館が、千葉県に移転して新たにオープンした、というニュースです。私はパチンコ史に関する書物を書いていること

もあり、移転前後の取材もさせて頂きました。その際一番思ったことは、業界側がパチンコを「文化」として大切に考えていかなければ、ファンの支持を集め続けることは難しいのではないだろうか、ということです。

ここ数年、パチンコ離れも深刻化している状況ですが、背景としてパチンコ好きな、あるいは好きだった人が何を求めているのかを考えることなしに、単なる商売として成長のみを追求していくような姿勢が、受け入れられなくなった可能性があると思います。

そんな状況の中、今回の「パチンコ博物館」の再開が、業界関連会社の協力によって行われたことは、大きな意義があるといえます。対象物の歴史を知り、文化としての役割や魅力を再発見しつつ、ファンに愛され続けるために生かしていく…。遊技業界でも、そうしたことが常に実践されるべきだと思うからです。

2012年も、あと僅か。今回は今年を振り返りながら、遊技業界がファン人口を増やしていけるかどうか重要な時期を迎えつつある中、少しでもヒントになるのでは…と考えた出来事を取り上げてみました。2013年が皆様にとっても素晴らしい年であることを、お祈り致します。



日遊協の「フェスタ」に多くのファンが参加した